

鹿島長行の和歌詠草四種について

渡邊 健

(米子工業高等専門学校)

摘要

本稿では、鹿島長行の四種類の和歌詠草を対象として、その成立と相互関係につき考察する。これらは、近世後期に米子の豪商として栄えた鹿島家（鹿島本家）の九代・鹿島長行により、嘉永六年（一八五三）から安政四年（一八五七）にかけて作成された和歌草稿である。長行は主に鹿島家で行われた二十種の歌会・歌合を集成した『無題歌合集』を嘉永七年春に成立させたとみられるが、同年夏、『甲寅夏 詠草』を編んだ。その後、安政二、三年頃までに『和歌雑集』、『和歌 長行』が前後して成り、さらに『和歌 長行』を整理・増補して安政四年に『採風集二編料』が成立したと考えられる。

キーワード…鹿島家 鹿島長行 米子歌壇 類題和歌集

一 はじめに

稿者は近年、幕末期の米子歌壇に関心を持ち、その活動の中心となった鹿島家の歌人と和歌資料についての調査・考察を続けてきた。特に鹿島本家九代の鹿島長行の編集・作成した書物には重要なものが多く、『嘉永六年十一月十日鹿島家歌合』『無題歌合集』を翻刻・紹介するとともに、『無題歌合集』の分析を通して鹿島家歌会・歌合と米子歌

壇の実態について考察した^①。また、鹿島長行が安政四年刊の『類題採風集』二編に投稿した際の草稿である『採風集二編料』『甲寅夏 詠草』の翻刻紹介も行った^②。

鹿島長行の作成した和歌関係の書物としては、右の他に和歌詠草である『和歌雑集』『和歌 長行』があることが知られており、稿者も数年前に一見したが、本文のない頁も多く、後述する書物の体裁からは詠歌の備忘録的なもののように見え、さほど重要な著作とはみなしていなかった。しかし、近時その翻刻作業を行った結果、長行の作歌

と類題和歌集とのつながりを考えさせる重要な資料であることを確認した。また、昨年翻刻・紹介した『採風集二編料』『甲寅夏 詠草』とも密接な関連を有することが明らかになった。本稿では以下、鹿島長行のこれら和歌詠草四種の相互関係と成立時期・過程について、稿者が現時点で得ている理解を述べてみたい。③また、鹿島長行についての考察が進むにつれ、稿者が従来公にした見解に関して訂正を要する点も生じてきている。それらについて以下、論述したい。

二 『無題歌合集』所収の歌会・歌合の成立年次について

ここで、本稿での以下の考察に関わる問題であるため、稿者が以前、鹿島長行の編集した『無題歌合集』の成立年代について提示した見解について訂正を加えておきたい。④『無題歌合集』は、鹿島長行が幕末に主に鹿島家で行われた二十度の歌会・歌合を記録した書物であり、重複歌を含め一〇一四首が収められている。二十種の歌会・歌合にはそれぞれ次のように、冒頭に歌会・歌合の月日、場所、題、判者等が簡潔に書かれている。（便宜上、収録された順に丸数字を付す）

- ① 神無月朔日略会詠歌青々庵
- ② おなじく十九日略会 滄廼舎
- ③ おなじく廿八日略会虎嘯軒くさぐさ
- ④ 霜月二日略会 日孝
- ⑤ 兼題 橋上霜 古蔭撰
- ⑥ 兼題 鷹狩 古蔭喜蔭両撰
- ⑦ 兼題 閑居夢 古蔭撰
- ⑧ 兼題 馬 古蔭撰

⑨ 兼題 冬暁月

⑩ 網代

⑪ 埋火 寄山恋

⑫ 題 立春 社頭松

⑬ 雪中若菜

⑭ 山家鶯

⑮ 田家梅

⑯ 九月末つかた 喜蔭撰

⑰ 遠山雪 喜蔭武彦両撰

⑱ 喜蔭武彦両評

⑲ 題 朝落葉 炭竈 橋 喜蔭評

⑳ 兼題 立春 喜蔭武彦

これら二十の歌会・歌合の年次につき、稿者は前稿で次のように考えていた。つまり、『無題歌合集』では、⑪の末尾に「嘉永六とせのうし」と記されているので、①～⑪までは嘉永六年（一八五三）の十月から十二月、⑫～⑱は翌嘉永七年（十一月二十七日に改元して安政元年）、⑳は月日は記されないものの、⑰・⑱の歌合が主に冬題であるのに対し、立春から始まる四季題で歌が詠まれているので、年の明けた安政二年正月のものではないか、と推定した。また、歌会／歌合の別、判者の違いや参加歌人の傾向等から右を三期に分け、

一期 ①～④ 嘉永六年十月一日～十一月二日 「歌会」が、参

加する歌人の持ち回りで開く場所を決めて行われていた時期

二期 ⑤～⑮ 嘉永六年十一月～七年春 小谷古蔭を指導者に迎

え、「歌合」が行われていた時期

三期 ⑯～⑳ 嘉永七年九月～安政二年正月 佐々木喜蔭・中林武

彦を判者として「歌合」が行われていた時期

と考えた。

ただし、前稿で今後の課題として挙げたように、前稿では各歌人の類題和歌集への入集状況について言及しながら、鹿島家歌会・歌合で詠まれた歌がどの程度、どのような形で当時の類題集に採られているかの調査ができておらず、その後、鹿島長行の類題集入集歌を『無題歌合集』所収歌と付き合わせていく中で、右の私見を訂正すべき事例が確認された。詳しくは別稿にて論じたいが、鹿島長行は嘉永七年刊の『類題鴨川集』五郎集に八首入集しており、その中の三首が『無題歌合集』所収歌と一致する。この三首を以下便宜上、A・B・Cとして掲げる。

A きりくすなくねさびしき夕暮にをの、しの原小雨ふるなり

(類題鴨川集・五郎集・秋・六ウ)

↓無題歌合集⑩「九月末つかた 喜蔭撰」五、三〇(重出)

B ふる雪に松やうもるゝすみがまのけぶりをめぐる夕がらすかな

(同・冬・一七オ)

↓無題歌合集⑨「題朝落葉炭竈橋 喜蔭評」二六・七六(重出)⁵⁾

C 雨そゝぐ軒のむら竹風過ぎてまくらにおつるかねのおとかな

(同・雑・三二ウ)

↓無題歌合集⑮「田家梅」五四

稿者の前稿の考察に従えば、Aは三期で嘉永七年九月末、Bは三期で嘉永七年冬、Cは二期で嘉永七年春の歌となり、A・Bが『類題鴨川集』五郎集の入集歌であることと齟齬を生じる。『鴨川集』五郎集には刊記がないが、序文末に「嘉永七とせといふとし 春むつき 桂有影」とあるため、嘉永七年中の刊行とみられ、序文に記載のある同年

正月から八ヶ月以上も過ぎた九月末や冬に詠まれた歌が同集に入集したとは考えにくい。

このため、前稿で提示した三期の区分には見直しが必要になるが、ただし、稿者は一期・二期の歌会・歌合が嘉永六年十月〜翌七年春に行われたものとして扱うことには不都合はないと考えている。先述したように、⑩の末尾に「嘉永六とせのうし」とある記述を疑う必要はなく、また⑫「題 立春 社頭松」は歌合本文の後に判者・小谷古蔭の次の歌が付されている。

年内立春の又のとしの元日に

年の内の春は春とも知らざりきあなすがすがし今朝のこゝろの
昨年は旧年中の立春で新年という実感がなかったが、今年の元日は新年立春なので心から新年を迎えた喜びが感じられるの意である。これに該当する年をこの頃に求めるため、嘉永五年(一八五二)〜安政二年(一八五五)の正月一日が、それぞれグレゴリオ暦日ではどの月日に当たるかを確認する⁷⁾。立春は毎年二月四日頃であることから、それぞれの正月一日が前年の十二月にくる年内立春か、元日以後にくる新年立春かを判断してその後に示す。

嘉永五年(一八五二) 一月二十一日 新年立春

嘉永六年(一八五三) 二月八日 年内立春

嘉永七年(一八五四) 一月二十九日 新年立春

(↓十一月二十七日改元、安政元年)

安政二年(一八五五) 二月十七日 年内立春

これを見ると、前年が年内立春、今年が新年立春という古蔭の歌の内容に合致するのは、嘉永七年の場合であることがわかる。古蔭のこの歌は嘉永七年の元日に詠んだものとみてよいだろう。

したがって、『無題歌合集』の一・二期の①～⑮までは嘉永六年十月～翌七年春までの歌会・歌合の歌がおそらく年次順に収められていると考えられるが、問題は三期である。前稿では二期の全ての歌合で判者を務めた小谷古蔭（ただし⑥は古蔭と佐々木喜蔭の共判）が嘉永七年春以後に米子を去り、同年九月末から佐々木喜蔭・中林武彦を判者として鹿島家で歌合が再開され、それが翌安政二年春まで続いたと推測していた。しかし、『無題歌合集』に嘉永七年刊『鴨川集』五郎集の入集歌が含まれることが、このような考えに抵触する。

そこで、これらを合理的に解決する試案としては、三期の歌合が一・二期と相重なる時期に行われており、歌合の判者の違いにより前後に分けて記録したとみるのがよいのではないか。前稿で考察したように、二期と三期とでは判者だけでなく歌合への参加歌人とその人数にも違いがあるが、歌人として著名な小谷古蔭と、米子歌壇の重鎮ではあってもそれほど知名度は高くない佐々木喜蔭・中林武彦が判者を務める時とでは参加者に違いがあったのかもしれない⁸。以上のことから、『無題歌合集』に収められた歌会・歌合は、嘉永六年九月末から翌七年春までのものとみられると訂正したい。『鴨川集』五郎集の序文に嘉永七年春正月とあることは先述したが、鹿島長行はおそらくそれからさほど時が経たない時点で『無題歌合集』所収歌を含む詠歌をまとめ、投稿したことが考えられる。

三 鹿島長行の和歌詠草四種について

以下本稿では、鹿島長行の四種類の和歌詠草を対象として、その成立と相互の関係につき考察していく。それに先立ってまず本節では、

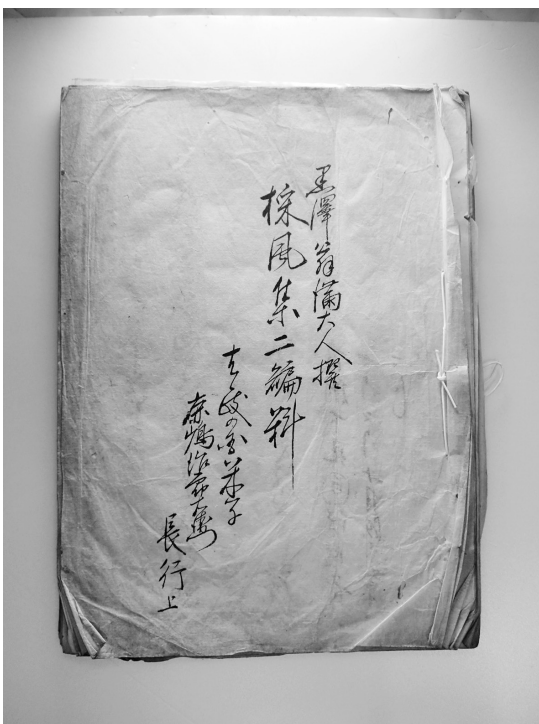
それぞれの書誌について簡単に紹介しておく。

この四種類の和歌詠草はいずれも鹿島長行の自筆資料で、米子市立町の鹿島恒勇家（鹿島本家）旧蔵、現在は米子市立山陰歴史館の所蔵である。これらは書物の体裁・内容・作成の目的からみて、長行が『類題採風集』二編（安政四年刊）に和歌を投稿する際の資料となった『採風集二編料』『甲寅夏 詠草』と、長行が自詠の記録・整理のための草稿としたとみられる『和歌雑集』『和歌 長行』に分けて理解するのが妥当と考えられるので、以下、その順に説明する⁹。

(1) 『採風集二編料』『甲寅夏 詠草』について

『採風集二編料』

（写真1）



〔整理番号〕 米子市教育委員会整理番号「C1MG 〇二二一」

〔表紙〕 縦二八・二種×横二〇・四種 本文共紙 無地

〔外題〕 表紙中央に「黒澤翁満大人撰 採風集二編料」と直書 その

左下に「は、きの国米子 鹿嶋治郎右衛門 長行上」と国所と作者の名を記す

〔体裁〕 袋綴写本一冊 大本よりやや大きな書型 楮紙

〔本文〕 一面八行 和歌一首一行書き

〔丁数〕 全二二丁（全丁墨付）

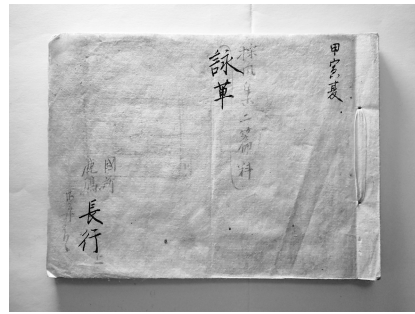
〔構成〕 部立はなく、春・夏・秋・冬・雑（恋歌を含む）の順に二一七首を収める

〔備考〕

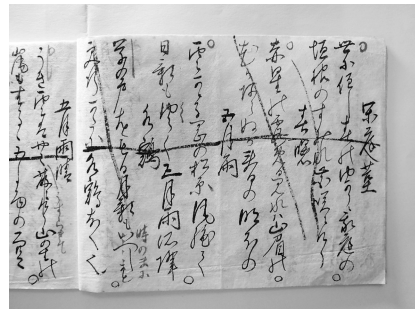
鹿島長行が安政四年（一八五七）刊、黒澤翁満撰『類題採風集』二編に投稿する和歌をまとめた資料である。表紙見返しには、「古樹下見①印廿八首ヤリタリ 十月頃ニハ出来ニ候」とあり、米子の歌人で『類題採風集』二編の序文を書いた中林古樹が、長行の投稿前に本書の下見を行い、①印も付したことが分かる。『類題採風集』二編の刊記に安政四年十一月とあることとの対応を考えると、本書は同年十月以前の成立ということになる。本書には、しばしば本文とは別筆で、和歌に合点や種々の符号、抹消線や語句の修正等が書き込まれており、長行が『採風集』二編への投稿に当たって、複数の者による下見や添削を受けていることがうかがわれる。地方歌人の全国的な類題和歌集への投稿の実態を考える上で重要な資料である。

『甲寅夏 詠草』

（写真2）



（写真3）



〔整理番号〕 米子市教育委員会整理番号「C1MG 〇二四〇」

〔表紙〕 縦一三・三種×横一八・〇糎 本文共紙 無地

〔外題〕 表紙中央に「詠草」と直書、右上に「甲寅夏」、左下に「長行」と記されている。朱筆で「詠草」の字の右に「採風集二

篇料」と書かれ、作者の所にも朱筆で「（国所）（鹿嶋）長行（上）（御印可下候）」と書き加えられている（（）内が朱筆）

〔体裁〕 袋綴写本一冊 横中本ほどの大きさ 楮紙

〔本文〕 一面六〇二二行 和歌一首二行書き

〔丁数〕 全一八丁 内墨付一三丁

〔構成〕 歌の部類・整理はなく、八四首を収める（重出歌六首を含む）

〔備考〕

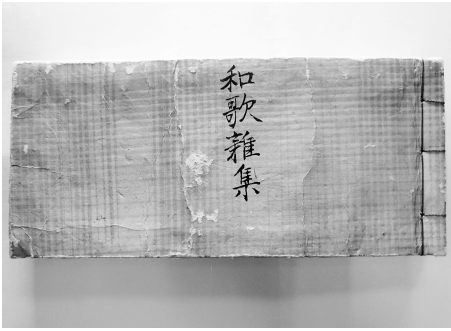
本書はその体裁からいっても、嘉永七年（一八五四・甲寅）夏という時期からいっても、元々は簡易な和歌草稿で、長行がしかるべき相

手に添削を請うために作成したものであろう。それがその後いずれかの時点で、長行が安政四年（一八五七）刊の『類題採風集』二編に和歌を投稿する際の資料源として利用されることになったのではないかと見られる。前出『採風集二編料』とは八四首中七三首が共通し、両書が密接な関係を有することは明らかである。本書には朱筆による合点や丸印、歌題や和歌の語句の訂正・補入の指示等が、本文とは別筆で多く書き込まれている。一方、歌の下部に丸印が黒字で付されていたり、歌に大きく横線や斜線を引いている箇所が多くある（当該歌の除棄を示すと見られる）のは、後述するように長行本人による措置であるとみられる。

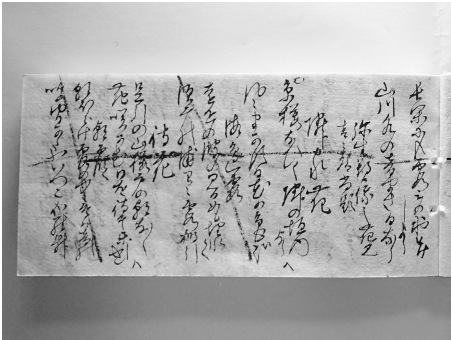
(2) 『和歌雑集』『和歌 長行』について

『和歌雑集』

(写真4)



(写真5)



〔整理番号〕 米子市教育委員会整理番号「C1MG0二三七」
 〔表紙〕 縦八・〇種×横一七・六種 砥粉色の地に代赭色の格子縞
 〔外題〕 表紙中央に「和歌雑集」と直書
 〔体裁〕 横本 美濃三つ切りよりやや小さいくらい大きさ
 楮紙 袋綴写本一冊 紫色角裂あり
 〔本文〕 一面一五行 和歌一首二行書き
 〔丁数〕 全九二丁 内墨付二六丁
 〔構成〕 春・夏・秋・冬・雑の部に分かれ、二〇六首を収める
 (重出歌六首を含む)

〔備考〕
 春・夏・秋・冬・雑の部に分かれているが、「雑集」という名のよ
 うに各部の内部は雑然とした歌の配置となっており、季節の推移や主
 題による整理・分類はなされていない。順不同で各部に該当する歌が
 数次にわたって書き足されていったような印象を受ける。裏表紙見返
 しに「嘉永六年の春 相改 長行」と記されているが、年次の分かる
 歌の多くは『無題歌合集』に収められる嘉永六年冬〜嘉永七年春の歌
 であり、「嘉永六年の春」は成立の時期でなく、長行がこの和歌詠草
 に歌の記録を始めた頃に当たるとは思われないかと思われる。二〇四歌詞
 書に「鹿島重正が四十の賀に春祝といふ事を」とあるが、長行の親族
 に当たる下鹿島家三代・鹿島重正は文化一三年（一八一六）生まれの
 ため、その四十の賀は安政二年（一八五五）ということになる。この
 歌は年次が判明する最も新しい歌であり、本書の成立は安政二年春以
 降と考えられる。本書にはまた、所収歌の多くに合点、符号が付され
 ており、長行本人によるものとみられる。歌頭に山型の符号や、和歌
 本文に抹消線や大きな〇印が施されているのはその歌の除棄を示すと

思われる。

『和歌 長行』

〔整理番号〕 米子市教育委員会整理番号「C1MG0二二二六」

〔表紙〕 縦八・〇糎×横一七・五糎 砥粉色の地に代赭色の格子縮

〔外題〕 表紙中央に「和歌」と直書 表紙左下に「長行」と記す

〔体裁〕 横本 美濃三つ切りよりやや小さいくらいの大ささ

楮紙 袋綴写本一冊 紫色角裂あり

〔本文〕 一面三〜二行 和歌一首二〜三行書き

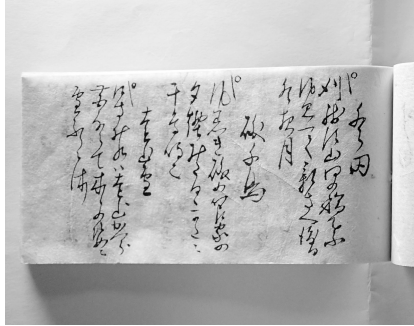
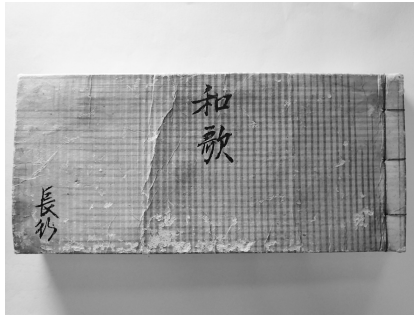
〔丁数〕 全九七丁 内墨付四五丁

〔構成〕 春・夏・秋・冬・雑の部に分かれ、一七二首を収める

(ただし、春・夏・秋部は冒頭にその記載を欠く)

(写真6)

(写真7)



〔備考〕

先に紹介した『和歌雑集』とは丁数に違いがあるものの体裁が同一であり、同じ折に作成された本と考えられる。両書とも簡便な横本で

鹿島長行の和歌詠草四種について(渡邊 健)

あり、詠歌の記録・整理用の草稿として使用されていたのではないだろうか。両書と比較すると一四三首が共通し、密接な関係を有することとは明らかであるが、『和歌 長行』の方は各部の内部で歌が季節の推移や主題により整理されており、歌に付された合点・符号類も少なく、歌の除棄を示す抹消線なども施されていない。『和歌 長行』は『和歌雑集』を整理・増補して成った改訂本と位置づけて誤りないだろう。その成立の時期であるが、年次の判明する最も新しい歌として、本書の八一歌の詞書に「卯 八月十五夜実成寺御歌会に 月」とある。「卯」は安政二年(乙卯)をさすとみられ、同年秋以降、後述する『採風集二編料』との関係からは、おそらく翌安政三年中までには成ったのではないかと考えられる。

こうして、本節で見たように、鹿島長行の四種類の和歌詠草は、最初に『甲寅夏 詠草』が嘉永七年夏に成立、その後、安政二、三年頃に『和歌雑集』と『和歌 長行』が前後して成り、安政四年に『採風集二編料』が編集されたと考えられる。それでは、これら四種の詠草は相互にどのような関係にあるのだろうか。以下、各資料の作品内部の検討を通して、この問題につき考察していく。

四 『甲寅夏 詠草』の成立

(1) 内容・成立

前節で見たように、『甲寅夏 詠草』は後に『類題採風集』二編に和歌を投稿する際の資料として利用されたが、もともとは嘉永七年夏、しかるべき歌人に添削を乞うための和歌草稿として作成されたのみられ、歌数も八四首と少ない。部立もなく四季・恋・雑の歌が順

序・内容の整理もなされないまま、ただ雑然と収められているだけという印象を受ける。

鹿島長行が本書を作成するに当たり、同年春に成立したとみられる『無題歌合集』所収の自詠は当然参照したはずだが、実際に両書に共通する歌はわずか六首に過ぎない。そのうちの三首は本文に若干の異同があり、たとえば『無題歌合集』⑭「山家鶯・春恋」の

いつしかと我が住む山も春めきぬ長閑に聞かむ鶯の声(六)

が、『甲寅夏 詠草』では、

いつしかと我が住む山も春めきて長閑にもなく鶯のこゑ(二〇)

と三四句にわずかに語句の変更がみられる。他方、『無題歌合集』との共通歌六首を除く七八首は、本書成立までに新しく詠まれた歌ではないかと思われる。

(2)『和歌雑集』『和歌 長行』『採風集二編料』との関係

本書と『和歌雑集』とは一首が共通し、『和歌 長行』とは三四首、『採風集二編料』とは七三首が共通する。このことについて稿者は、『和歌雑集』↓『和歌 長行』↓『採風集二編料』の順に改訂がなされ、それぞれの成立の全ての段階で本書から歌の増補が成されたと考えている。

その根拠の一つ目は、『甲寅夏 詠草』の歌に添削が行われている場合、その多くが添削後の本文で他の三つに採られていることが挙げられる。一例を挙げると、本書は『無題歌合集』⑰「遠山雪 喜蔭・武彦両撰」から

此の頃の垣根は雪に埋もれてたゞ珍しき花を見るかな(三六)

の歌を採っているが、そこには朱筆で

此のころの垣根は雪に埋もれてたゞめづらしき花を見る載(二二)

という添削がなされている。この歌は『和歌雑集』『和歌 長行』では増補歌にならなかったが、『採風集二編料』では

此のころの垣根は雪に埋もれてひとりやつれぬ花の色かな
と、添削後の本文の形で採られている。

根拠の二つ目は、『和歌雑集』『和歌 長行』と共通する歌は、本書の和歌本文に大きく斜線または「×」で除棄した印が付いていることである。本書と『和歌雑集』とで共通する歌は一首、『和歌 長行』と共通する歌は三四首あるが、両者に重複しない一首を省いた三四首に除棄の印があり、例外は一首しかない。おそらく本書から『和歌雑集』、続いて『和歌 長行』に転記した際に、長行がその確認のために行った作業なのであろう。そして、『採風集二編料』の作成の際には、その印のない歌から増補歌四六首を選んだものと考えられる。

五 『和歌雑集』の成立

(1) 内容

「書誌」に書いたように総歌数は二〇六首であるが、重出歌が六首ある。『和歌雑集』での歌番号と題で示すと、九一「四六」春旅、一二一「四七」春旅、四五「六九」田上霧、一二四「一五二」埋火、一二五「一六三」埋火、一四四「二〇二」祝が同一歌であり、重複歌を除いた歌数は二〇〇首となる。その他に、九〇と一三二は共に「霞」題で表現・発想が類似し、あるいは改作歌かともみられるが、今は別歌として扱う。

本書内部に重出歌があることは長行も認識しており、夏部の最後にある「田上霧」題の歌は、

45 かきつ田の稲葉のほのへ霧こめてるせきの水の音むせぶ也

秋に出也

という注記があるように、秋部の最後六九に同題の同じ歌が収められている。また、冬部の最後に

国造殿御賀に送之

144 とし高くしげれる松に鶴山の千代をあらそふ色は見えけり

此分雑之対二出ス

とある歌は、注記のように雑部二〇二に詞書・歌とも同じ歌が載る。雑部にある「歳暮」題の

159 にぎほへるとしの市路の夕烟あすは霞に立ちかはるらん

前へ出ス

という歌は本書には重出歌はないが、注記が示すように歌の題・内容からいえば雑部でなくその前にある冬部に収めるべき歌であるということであろう。

(2) 『無題歌合集』所収歌との関係

本書に収められた歌がそれぞれいつ、どのような機会に詠まれたかについては分からないものも多いが、『無題歌合集』所収の長行歌と一致するものが四九首あり、注目される。(『無題歌合集』の歌を改作した可能性のある歌が二首あるが、今は数えない。)『無題歌合集』には長行の歌が一〇三首あり、重複歌二八首を除くと七五首となるが、長行はそこから六割ほどの歌を『和歌雑集』に採っている。

表1 『和歌雑集』と『無題歌合集』の共通歌

	雑集歌数	無題共通歌
春部	34	7
夏部	11	1
秋部	24	6
冬部	75	※22
雑部	62	13
計	206	※49

表1により、『和歌雑集』各部の歌数と『無題歌合集』所収歌との一致を見ると、春部七／三四、夏部一／一一、秋部六／二四、冬部二二／七五、雑部二三／六二、計四九首となり、総歌数二〇六首の四分の一ほどが共通している。(ただし、冬部一四二と雑部一五二が重出歌。)両者の先後関係については、長行が『無題歌合集』を書物としてまとめた後で、そこから『和歌雑集』に歌を採っているようである。冬部を例にとるのがわかりやすいが、表2に示したように、『和歌雑集』冬部(歌番号七〇～一四四)の内、『無題歌合集』の歌は八〇、九〇、九一、九四・九五、一二二～一二四、一二六、一二八～一三二、一三四～一四〇と連続して現れることが多い。それらの歌題はほとんどが『無題歌合集』のままである一方、それぞれの歌の『和歌雑集』に記されている順序は、元々の歌会や歌合が行われた時期の順になっていない。このため、両書の共通歌は、『無題歌合集』が一書として成った後に、長行がしかるべき歌を選び、『和歌雑集』の各部に振り分けて書き写したものであろうと考えられる。

表2 『和歌雑集』と『無題歌合集』の共通歌

雑集 歌番号	雑集 歌題	雑集 初句	無題 歌題	無題 初句	無題歌 合番号	詠歌 年次
80	橋上霜	ゆふづきの	橋上霜	ゆふづきの	⑤	嘉永六・冬
90	霰	こずゑふく	霰	こずゑふく	⑳	嘉永七・春
91	霰	をざさはら	霰	をざさはら	②	嘉永六・十
94	冬田	かりのこす	冬田	かりのこす	④	嘉永六・十一
95	冬暁月	ゆめさむる	冬暁月	ゆめさむる	⑨	嘉永六・冬
121	初雪	あさぼらけ	初雪	あさぼらけ	⑯	嘉永六・九
122	遠山雪	しらくもも	遠山雪	しらくもも	⑰	嘉永六・冬
123	埋火	いつしかと	埋火	いつしかと	⑪	嘉永六・冬
124	埋火	ひとりもる	埋火	ひとりもる	④	嘉永六・十一
126	朝落葉	あさとでに	朝落葉	こさめふる	⑲	嘉永六・冬
128	炭竈	ふるゆきに	炭竈	ふるゆきに	⑲	嘉永六・冬
129	炭竈	しぐれゆく	炭竈	しぐれゆく	⑲	嘉永六・冬
130	炭竈	あさひかげ	炭竈	あさひかげ	⑲	嘉永六・冬
131	霰	こずゑふく	霰	こずゑふく	⑳	嘉永七・春
132	初雪	あさかぜに	初雪	あさかぜに	⑯	嘉永六・九
134	山家冬	このはふく	山家冬	このはふく	⑰	嘉永六・冬
135	山家冬	ふゆはなほ	山家冬	ふゆはなほ	⑰	嘉永六・冬
136	雪中眺望	うちわたす	雪中眺望	うちわたす	⑰	嘉永六・冬
137	雪中眺望	ふきすさぶ	雪中眺望	ふきおろす	⑰	嘉永六・冬
138	水仙花	わがそのの	水仙花	わがそのの	⑰	嘉永六・冬
139	朝落葉	たつたやま	朝落葉	たつたやま	⑲	嘉永六・冬
140	夜霰	よただふく	霰	よただふく	⑳	嘉永七・春

一方、『和歌雑集』と『無題歌合集』とで歌の本文が異なっている場合も少なくない。『和歌雑集』にその歌を採る際に長行自身が歌句を変更しているとみられるものもあれば、元の歌合が行われた折に判者によって添削された後の本文を採用している場合もある。後者の一例を挙げれば、

遠山雪

122 白雲も立ちはなれたる遠方の高根の雪に朝日さす也

の歌は、『無題歌合集』では元々、

ひんがしの雲もみだれて遠方の雪の高ねに朝日さすなり

(⑰) 遠山雪 喜蔭・武彦両撰・一)

と詠まれていたが、当該の歌合では「抜き歌」に選ばれ、判者の佐々木喜蔭により、

白雲もたちはなれたる遠方の雪の高ねに朝日さす也

と初・二句が改められている。『和歌雑集』には、この添削後の本文の形で採られている。

ただし、両書の共通歌を確認していくと、添削後でなく初め詠まれた本文で採られているもの、新たに歌句を変更したと考えられるものもあり、長行は『無題歌合集』の歌を『和歌雑集』に収めるに当たって、本文を推敲しよりよい歌にしようと工夫していた跡がうかがえるのである。

(3) 『甲寅夏 詠草』との関係

「書誌」で言及したように、『和歌雑集』には『甲寅夏 詠草』との共通歌が一首あり、後者から増補されたと考えられる。内訳は春部に一〇首(一、三、五、八、一〇、三三、三四)・夏部に一首(三九)であり、春部に偏っている。一一首中四首に本文異同があり、その内の二首は『甲寅夏 詠草』で添削された本文の形で『和歌雑集』に採られている。一例を挙げると、『甲寅夏 詠草』の

海上霞

舟^{海人舟}の行く^へを^へしたふ山風^山非^山〔見えて〕沖の霞も〔打ち〕なびき

つねおな(、)、(一一)

の歌は、朱筆で右のような添削が施されているが(、)内は添削による挿入)、『和歌雑集』では

海士舟の行くへをしたふ風見えて沖の霞も打ちなびきつ、

(二三四)

と、添削後の本文の形で収められている。前節で述べたように、『甲寅夏 詠草』では、『和歌雑集』『和歌 長行』との共通歌には除棄を示すとみられる抹消線が引かれていることから、両者の共通歌は『甲寅夏 詠草』からの増補とみなすべきであろう。

(4) 成立時期と製作の意図

巻末に「嘉永六年の春 相改 長行」とあるが、「書誌」で言及したように、本書が成立した時期をさすわけではなく、この頃から長行の本格的な和歌活動が始まり、本書への記録がなされるようになったと考えられる。『無題歌合集』との共通歌は嘉永六年九月末～七年春の時期に当たりますが、『和歌雑集』の全体の四分の三を占めるそれ以外の歌は、大部分が作歌年次のわからない歌である。ただし、『和歌雑集』の雑部には、少ないながら詞書から他資料等によつて年次を特定できるものがある。

重意居士七めぐりに

158 春の夜の月は昔に霞めどもたゞ目の前の佛にして

重意は長行の同族である下鹿島家二代で弘化四年(一八四七)正月卒、六十六歳。「七めぐり」が七回忌をさすなら、この歌は嘉永六年(一八五三)正月の詠となる。

重好の母身まかり給ふに 哀傷

177 風さそふみ草の露と消えにけり君がかたみは言葉のみして

重好は先述した重意の四男で長行より四歳の年長であり、長行と親しい交流があった。『鹿島重好歌集』にもその母の死を悼んだ歌があるが、それによれば嘉永六年九月二十五日に亡くなったことがわかる。

鹿島長行の和歌詠草四種について(渡邊 健)

鹿島重正が四十の賀に春祝といふ事を

204 八重霞千重にたなびく春山のすゑはるかにもみゆる君哉

鹿島重正は重意の長男で下鹿島家三代である。文化一三年(一八一六)生まれのため、この四十賀が行われたのは安政二年(一八五五)春のことであろう。

この他、『和歌雑集』の成立時期を考える材料としては、当時の類題和歌集がある。嘉永七年刊『類題鴨川集』五郎集に長行は八首入集しているが、その八首中七首が『雑集』と共通する。(二六・四六・五〇・五四・九二・一二八・一八五)また、編者・加納諸平の死により稿本で終わった『類題鯉玉集』八編に長行の歌が六首見えるが、それらは全て『和歌雑集』に収められている。(八二・九三・九八・一五三・一五八・一七一)加納諸平の死は安政四年(一八五七)六月二十四日のことであるので、長行がそれ以前に自歌を諸平に投稿していたことは明らかである。

これらのことから考えると、『和歌雑集』は嘉永六年春頃から鹿島長行が詠んだ歌が、四季・雑の各部に分け数年にわたって書き足されていった和歌草稿であり、『鴨川集』五郎集や『類題鯉玉集』八編に投稿する際にも資料として利用されたことが考えられる。成立の下限は安政四年になるが、後述する『採風集二編料』との関係から、実際にはそれ以前に成立していたと思われる。このことについては、第六節で言及する。

六 『和歌雑集』から『和歌 長行』へ

(1) 成立の順序

『和歌 長行』は、『和歌雑集』と同じく春・夏・秋・冬・雑の各部に分けて鹿島長行の和歌が収められた書物で、総歌数一七二首である。『和歌雑集』とは一四三首(その内三首は重出歌)が共通し、両書が密接な関係にあることは明らかである。両書はまた、「書誌」で見たとように本の体裁がほぼ同様であり、相前後して成立した書物と考えられる。

その先後関係であるが、『長行』には重出歌はなく各部の内部で歌が季節の推移や主題によって整理されており、『雑集』の改訂本とみられ、その逆の成立順は考えられない。『雑集』の和歌本文には斜線等で大きく抹消されているものが多いが、『長行』に転記した歌を消していったものと思われる。『雑集』の成立後、あまり時日を隔てずに『長行』がまとめられたものであろうか。

(2) 『和歌雑集』と『和歌 長行』の比較検討

表3 『和歌 長行』と『和歌雑集』との比較

	長行 歌数	雑集 歌数	共通 歌数	増補 歌数
春部	36	34	29	5
夏部	23	11	10	13
秋部	32	24	24	7
冬部	53	75	53	0
雑部	28	62	27	1
計	172	206	143	26

表3に『長行』と『雑集』を比較した結果を示したが、前者から後者への改訂のプロセスにつき整理して説明すると、次のようになる。

① 春部は、『雑集』三四首のうち二九首を春部に採り、二首を雑部に

移し、三首は不採用、五首を増補して三六首とした。

② 夏部は『雑集』一首のうち一〇首を夏部に採り、一首を秋部に移し、一三首を増補して二三首とした。

③ 秋部は『雑集』二四首をそのまま採り、八首を増補して三二首とした。(『雑集』夏部から移した一首は、秋部に重出する歌)

④ 冬部は『雑集』七五首のうち五三首(そのうちの一首は重出歌)を採り、増補歌無しで五三首とした。

⑤ 雑部は『雑集』六二首のうち二七首(そのうちの一首は重出歌)を採り、三六首は不採用。『雑集』春部から移した二首と、増補歌一首を加えて二八首とした。

こうして、『和歌 長行』総歌数一七二首のうち、『和歌雑集』から採ったものが一四三首あり、残りの二九首は増補歌ということになる。

(3) 『和歌 長行』における改訂の内実

右に見たように、『長行』は『雑集』所収歌を整理・削除・増補して編集した改訂本といえる。『雑集』では各部内部で歌の順序は未整理であったが、『長行』では四季部は季節の推移によって、雑部は主題や詠歌機会によって歌の順序を整理している。ただし、各部内部での分類整理は歌題によるが、同一歌題の場合、その中で歌の順序が『雑集』での順序をそのまま残しているケースがしばしば見られる。(たとえば、秋部の「雨中雁」題歌群四首は、『長行』八二〜八五と『雑集』六二〜六五との歌の順序が一致する。また、『長行』の冬部前半は『雑集』をかなりそのままの形で利用しており、冬部冒頭の『長行』九二〜一〇八と『雑集』七〇〜八六は一七首の順序が完全に対応する。)

『雑集』は各部で歌数が著しく不均衡だったが、『長行』では各部の

歌を増補あるいは削除して、歌数も整えられている。『雑集』になく『長行』にある歌二九首は増補歌と見られるが、その依拠資料の主なものは『甲寅夏 詠草』であり、増補歌二九首のうち二四首が共通する。(春部七首、夏部一三首、秋部四首)残りの五首はおそらく新しく詠まれた歌であろう。

『長行』での増補歌を見ると、『雑集』から採った歌と同題の歌を足している場合が六首、『雑集』になかった題の歌を足している場合が二一首ある。このように、『長行』には各部の中でより多くの歌題の歌を収めたり、同題で違う趣の歌を補ったりと、類題和歌集への投稿を意識して改訂が行われていることがうかがわれるのである。

(4)記号や抹消線の意味

「書誌」に紹介したように、『和歌雑集』には和歌に多数の記号類や抹消線が施されているが、それらが『和歌 長行』への改訂とどの程度関連を持つのかについて、簡潔に説明しておきたい。

『雑集』二〇六首中、和歌の右肩に合点「へ」と「〇」が共に付けられている歌が一一三首、「〇」のみ付けられている歌が二首ある。「へ」「〇」を持つ歌が全体に占める割合を百分率で示すと六四％だが、『雑集』と『長行』の共通歌一四三首に占める歌数と割合は一一二首、七八％となる。(共通歌の各部での内訳を示すと、春一六／二九、夏一〇／一〇、秋二三／二四、冬三八／五三、雑二五／二七)「〇」が付けられた歌も二首とも『長行』に採られている。「へ」「〇」が付いた歌で、『長行』に採られなかったのは一九首のみであり、『雑集』から『長行』への改訂において、合点を有する歌が優先されている傾向があるとはいえそうである。

また、『雑集』には和歌の下に「△」が付いている歌が一六一首、

「△」が八首(その内一首は「〇」が共に施される)、「〇」が一首ある。便宜上これらを一括して扱おうと、『和歌雑集』二〇六首中一七〇首、八三％にこれらの記号が使われていることになる。一方、『雑集』と『長行』の共通歌一四三首に占めるこれらの割合は一三〇首、九一％となり、合点の場合よりも高い相関性がうかがわれる。(共通歌の各部での内訳を示すと、春一八／二九、夏一〇／一〇、秋二四／二四、冬五二／五三、雑二六／二七)

一方、『雑集』の冬部・雑部だけに見える例だが、和歌の中央あたりに大きな「〇」印が付けられたものが二〇首あり、すべて『長行』に採られていない歌である。その他、和歌の上部に大きな「△」の印(数首まとめた場合もある)を付けたら、和歌に大きく斜線や横線(多くは数首まとめた)が引かれているのは、おおむねその歌を『長行』へ転記済みの意味で施しているとみて差し支えないが、小教ながら例外も存する。こうして、『和歌雑集』から『和歌 長行』への改訂は、合点や記号を利用しながら行われたと考えられることが確認できる。

七 『和歌 長行』から『採風集二編料』へ

(1)『採風集二編料』と『和歌 長行』との比較

『採風集二編料』の成立について、稿者は以前、『甲寅夏 詠草』の表紙に朱筆で『採風集二篇料』と書かれていることから、『甲寅夏 詠草』を整理・増補して『採風集二編料』が成ったと考えていた。『甲寅夏 詠草』は、『採風集二編料』(総歌数二一七首)と八四首中七三首が一致し、両書が密接な関係を有するのは確かである。

しかし今回、『和歌 長行』について調査した結果、直接には『和歌 長行』を整理・増補して『採風集二編料』が編集されたと考えるに至った。部類されていない『甲寅夏 詠草』の歌から七三首を選んで四季・雑の部に分け、さらに一四四首を増補したと考えるよりは、すでに四季・雑の部に分類されている『長行』の歌序を整え、歌を削除・増補したと考える方が実態に合うためである。

表4 『和歌 長行』と『採風集二編料』との比較

	料歌数	長行歌数	共通歌	増補歌
春歌	30	36	30	0
夏歌	21	23	21	0
秋歌	47	32	24	23
冬歌	65	53	45	20
雑歌	54	28	24	30
計	217	172	144	73

「書誌」で触れたように、『採風集二編料』には部立がないが、春・夏・秋・冬・雑の順に、それぞれの歌が整理された形で収められている。そして表4が示すように、『採風集二編料』は、直接には『和歌 長行』を整理・増補して成立したと考えるのが妥当である。その過程を推測するならば、

- ①春歌は『長行』の三六首から三〇首を採り、増補歌無しで三〇首とした。
- ②夏歌は『長行』の二三首から二二首を採用した。
- ③秋歌は『長行』の三二首から二四首を採用し、一二三首を増補して四七首とした。

④冬歌は『長行』の五三首から四五首を採用し、二〇首を増補して六五首とした。

⑤雑歌は『長行』の二八首から二四首を採用し、三〇首を増補して五四首とした。

という改訂の方向が考えられる。両書に題・和歌本文の異同はほとんどなく、『採風集二編料』は『和歌 長行』の歌序を整理する以外はそのまま歌を採っているようである。

(2) 『甲寅夏 詠草』との関係

ここで『甲寅夏 詠草』は、共通歌の多さからも、表紙に「採風集二編料」と朱書されていたことから、『採風集二編料』と密接な関係があったはずだが、実際にはどう関わるのか。結論から述べると、表4にある増補歌七三首の内四六首の資料として利用されたと考えられる。『甲寅夏 詠草』は『和歌雑集』『和歌 長行』の成立の際にも増補歌の依拠資料となっており、鹿島長行は転記した歌に除棄の印となる線を引いていたことは前述した。長行はすでに『雑集』『長行』に採られた歌を除く四六首を『甲寅夏 詠草』から選び、『採風集二編料』への改訂に利用したことになる。増補歌の内二七首は他資料に見えない歌で、新しく詠まれた歌とみられる。

(3) 『採風集二編料』における改訂の内実

こうして、鹿島長行は『類題採風集』二編への投稿に当たって、これまでの詠歌全体の中から秀歌を集成することを期し、歌稿を作成したものである。改訂の内実は、秋歌で確認するのが分かりやすいため、表5に『採風集二編料』秋歌の全歌と『和歌 長行』『甲寅夏 詠草』との対応を一覧にして示した。これで確認すると、『採風集二編料』は『長行』を歌題によって整理し直し、また各題の内

『採風集二編料』		『和歌 長行』		『甲寅夏 詠草』	
52	初秋月	にしぞらに	60	初秋月	にしぞらに
53	初秋月	やまのべの	61	初秋月	やまのべの
54	野秋風	あさぼらけ			34 野秋風
55	野秋風	みわたせば			35 野秋風
56	川上霧	よしのがは			36 川上霧
57	山家砧	ときはぎの			4 砧
58	月	あきのよの			20 月
59	月	うきぐもは	71	月	うきぐもは
60	待月	なきつるる			39 待月
61	待月	つきをまつ			43 待月
62	虫	きりふかき			38 虫
63	虫	つきくらき			41 虫
64	虫	ゆふされば			42 虫
65	関路月	くもはらふ			46 関路月
66	月前管絃	さやかなる			47 月前管絃
67	月前管絃	いとたけの	62	月前管絃	いとたけの
68	月前管絃	すなほなる			48 月前管絃
69	鹿声何方	ありあけの			49 鹿声何方
70	鹿声何方	やまふかみ	63	鹿声何方	やまふかみ
71	月前擣衣	やまのはに			55 月前擣衣
72	月前擣衣	かのみゆる			56 月前擣衣
73	山家紅葉	やまひめの			58 山家紅葉
74	山家紅葉	あさぎりの			59 山家紅葉
75	山家紅葉	むらしぐれ			60 山家紅葉
76	山家紅葉	わけまよふ	87	山家紅葉	わけまよふ
77	擣衣	もみぢちる	74	擣衣	もみぢちる
78	擣衣	さよふけて	75	擣衣	さよふけて
79	萩	つきふくる	68	萩	つきふくる
80	萩	あきはぎの	66	萩	あきはぎの
81	萩	をやまだの	67	萩	をやまだの
82	雨中雁	むらさめを	82	雨中雁	むらさめを
83	雨中雁	うきぐもを	83	雨中雁	うきぐもを
84	雨中雁	むらさめの	85	雨中雁	むらさめの
85	庭菊	あさゆふに			51 庭菊
86	庭菊	さきつづく			52 庭菊
87	庭菊	はつしもは	86	庭菊	はつしもは
88	暮秋	きのふけふ			61 暮秋
89	暮秋	かりのこす			62 暮秋
90	暮秋	あさぢふの	88	暮秋	あさぢふの
91	霧中鹿声	きりふかき	69	霧中鹿声	きりふかき
92	蔦	あめはれし	70	蔦	あめはれし
93	きりぎりす	ものおもふ	72	きりぎりす	ものおもふ
94	きりぎりす	きりぎりす	73	きりぎりす	きりぎりす
95	菊露	きのふけふ	77	菊露	きのふけふ
96	菊露	つゆむすぶ	79	菊露	つゆむすぶ
97	雨中聞擣衣	たわやめが	76	雨中聞擣衣	たわやめが
98	田上霧	かきつたの	89	田上霧	かきつたの

表5 『採風集二編料』 秋歌と『和歌 長行』『甲寅夏 詠草』との比較

部でも歌序を改めている。そして、『長行』にない歌を『甲寅夏詠草』から増補していることが分かる。三者に共通する、網掛けで示した「にしぞらに」「つきふくる」の歌は、『和歌雑集』から『和歌長行』への改訂の際に、既に『甲寅夏詠草』から増補されていた歌である。これにより、『採風集二編料』の作成は、『和歌長行』を母体として歌序を整理しつつ、そこに『甲寅夏詠草』の歌を増補して行われた可能性の高いことが確認できる。

八 むすびに代えて

以上、本稿では鹿島長行の四種の和歌詠草を対象として、その成立過程とそれぞれの関係について考察した。その結果、この中では嘉永七年夏の『甲寅夏詠草』が最も早く成立し、その後安政二、三年頃までに『和歌雑集』が編まれ、続いて『和歌長行』が『雑集』を整理・増補して成立、さらに安政四年に『採風集二編料』が『和歌長行』を改訂・増補して成った可能性の高いことを述べた。一方、『甲寅夏詠草』は他の三つの成立に関して増補歌の資料源となったことを確認した。本稿ではまた、以前『無題歌合集』の成立年次について考察したときの誤りに言及し、現段階での訂正試案を提示した。

本稿の反省点としては、鹿島長行の和歌詠草の作成が、全国的な類題和歌集への投稿と関連することに言及しながら、その内実について考察が及ばなかったことがある。これを今後の課題とし、地方歌人の歌学や類題和歌集への投稿の実態、地方歌壇の活動のあり方についてという観点から別に機会を設け、改めて論じることとしたい。

注

- (1) 渡邊健・米子高専古文書の会「影印・翻刻 嘉永六年十一月十日鹿島家歌合」(『米子工業高等専門学校研究報告』第五三号、平成三〇年二月)。同
- 【翻刻・解題】山陰歴史館蔵『無題歌合集』(一)〜(三)。(『米子工業高等専門学校研究報告』第五五号、令和二年三月)。拙稿【研究ノート】山陰歴史館蔵『無題歌合集』について(『山陰研究』第二二号、令和元年十二月)。
- (2) 拙稿【翻刻・解題】山陰歴史館蔵『採風集二編料』(『山陰研究』第一三号、令和二年二月)。
- (3) 『無題歌合集』『和歌雑集』『和歌長行』『採風集二編料』『甲寅夏詠草』については、原豊二氏が「幕末の米子歌人―新出鹿島本家和歌資料の探求のために―」(『山陰研究』第三号、平成二二年二月)の中で書誌と資料の概要を紹介されており、今回参考にさせていただいた。
- (4) 『無題歌合集』の成立に関する見解、また同書の編者・鹿島長行については、注1拙稿【研究ノート】山陰歴史館蔵『無題歌合集』についてに詳述したので、説明はそちらを参照されたい。
- (5) この歌は『無題歌合集』によれば、長行が「み雪降る松のしげみに炭竈の煙をめぐる夕烏かな」と詠んだのが元の形である。その後、歌合の判者・中林武彦がこれを「抜き歌」に選んだ際に初・二句を添削して「降る雪に松や埋もる、」としたが、長行はこの歌を『類題鴨川集』に投稿する際には添削後の形の本文を採ったものと考えられる。
- (6) 『類題鴨川集』五郎集の本文及びその解題は朝倉治彦監修、中澤伸弘・宮崎和廣編『類題和歌 鯉玉・鴨川集』五六(クレス出版、平成一八年四月)を参照。朝倉治彦氏「資料」類題和歌鴨川集(近世後期類題歌集調査)六(『四日市大学論集』第一八巻第二号、平成一八年三月)も参考にした。
- (7) 加唐興三郎編『日本陰陽暦日対照表(下巻) 1101年〜1872年(康和3年〜明治5年)』(ニットー、平成五年九月)を参照。

(8) 小谷古蔭・佐々木喜蔭・中林武彦の歌人としての業績については、注1 拙稿「研究ノート」山陰歴史館蔵『無題歌合集』について」に詳述した。

(9) 以下、『採風集二編料』『甲寅夏 詠草』の書誌については、注2 拙稿「翻刻・解題」山陰歴史館蔵『採風集二編料』の「解題」を要約して記した。『和歌雑集』『和歌 長行』については、『米子工業高等専門学校研究報告』第五七号に「翻刻・解題」山陰歴史館蔵『和歌雑集』『和歌 長行』(令和四年三月発行予定)として翻刻本文と解題を掲載する予定である。

(10) 『無題歌合集』では、各歌合の本文の後に「抜き歌」あるいは「選り歌」として、判者とその歌合での秀作と認め選抜した歌が掲載されている。抜き歌にはしばしば判者による添削が施され、歌合の参加者に和歌の用語や表現を教示する意図がうかがわれる。判者が二人いる場合は、同じ歌が二人に選ばれることもある。この抜き歌として選ばれた歌は、もともと歌合で詠まれた歌とは区別し、ここでは重複歌として扱う。

(11) 『日本国語大辞典』(第二版)に「ななめぐり」(七巡・七回)は①七度めぐること。②「なななぬか(七七日)」に同じ。とあり、「七めぐりの忌」は七回忌・四十九日のいづれにも解しうる。だが後者の場合、弘化四年(一八四七)、長行十四歳の時にこの歌が詠まれたことになり、『和歌雑集』に収められる歌が、巻末に記載のある「嘉永六年の春」以降の歌であることと齟齬を生じる。また、長行の「七めぐりの忌」の用例を見ると、同じ『和歌雑集』二〇五歌に「十月町田■翁七めぐりの忌に 過ぎし世をしたふ園生の袖垣にたえずしぐる、窓の松風」、『甲寅夏 詠草』七歌に「七めぐりの忌に 天津空むかしの月の佛をしのぶこゝろも霞む夜半哉」とあり、過ぎ去った昔を懐かしむ心情が詠まれており、七回忌の意味に解するのがよいと考えられる。

(12) 『鹿島重好歌集』二四六歌に「嘉永六年九月二十日あまり五日の日、母みまかり給ひて野辺に送りて帰るとき 柞葉の名残の露を身にしめていつまでなかも夜半の虫の音」として見える。参照、拙稿「翻刻・解題」『鹿島重

好歌集』(『米子工業高等専門学校研究報告』第五四号、平成三二年三月)。

(13) 『類題鯁玉集』八編は、加納諸平が編集途中の稿本(正宗敦夫旧蔵)が岡山県備前市の正宗文庫に所蔵されている。稿者は中澤伸弘氏から私信で同書に鹿島長行の歌が採られていることを教示され、同文庫で当該書を閲覧したところ、長行の歌が六首あることを確認した。なお、『類題鯁玉集』八編の書誌については、『類題和歌 鯁玉・鴨川集』六(クレス出版、平成一八年四月)の解題を参照。

(14) 『無題歌合集』と共通する歌が二首あるが、直接には『甲寅夏詠草』からの採録とみられる。

〔付記1〕

本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域の文学・歴史関係資料の研究と活用に関するプロジェクト」(二〇一九〜二〇二一年度、代表・田中則雄)、科学研究費補助金(基盤研究(C))「近世後期の鳥取の和歌に関する資料調査と総合的研究」(課題番号20K0039代表・渡邊健)による研究成果の一部である。

〔付記2〕

本稿を成すにあたり、貴重資料の閲覧、翻刻と写真の掲載をご許いただいた山陰歴史館に深謝申し上げます。

On four kinds of the draft of waka which Kashima Nagayuki compiled

WATANABE Ken

(National Institute of Technology, Yonago College Department of Liberal Arts)

[Abstract]

This paper will describe the result of study on four kinds of the draft of waka which Kashima Nagayuki compiled. According to the present research, their creation and mutual relation can be thought of as follows.

They were written from 1853 to 1857 by Kashima Nagayuki who was the ninth of the Kahima family that was a wealthy merchant in Yonago in the late Edo period. In the spring of 1854 Nagayuki made a manuscript called "Mudai utaawase-syu" which compiles 20 times of poetry parties or poetry contests held in Kashima family, and in the summer of the same year he made "the draft of waka 1854 summer". Thereafter he created "waka-zassyu" and "waka Nagayuki" in this order by around 1855 or 1856, and furthermore he arranged and enlarged "waka Nagayuki" to compile "Saifu-syu 2 henryou" in 1857.

Keywords: The Kashima family, Kashima Nagayuki, Yonago poetry circle, Ruidai Waka-syu